

## 5. 「ヒノヒカリ」の整粒歩合が低下しにくい出穂後の温度条件(情報)

## [要約]

「ヒノヒカリ」では、出穂後 25 日間の日平均気温の平均値が 25℃を上回ると、白未熟粒の増加に伴って未熟粒の発生率が増大し、整粒歩合が低下しやすい。この温度条件を回避するためには、県南部では 9 月 1 半旬、県中部では 8 月 6 半旬に出穂させる。

研究室名 | 作物研究室

連絡先

086-955-0275

## [背景・ねらい]

「ヒノヒカリ」は本県中南部で広く作付けされているが、近年、登熟期の高温条件下で品質の低下が問題となっている。そこで、「ヒノヒカリ」の登熟期間の気温と白未熟粒、未熟粒発生との関係を調査し、白未熟粒、未熟粒の発生を抑え、整粒歩合を高めることができる温度条件を明らかにする。

## [成果の概要・特徴]

1. 白未熟粒を含む未熟粒の発生率は、出穂後 25 日間の日平均気温の平均値が 25℃以下では 30%以下であった(図 1)。
2. 白未熟粒の発生は出穂後 25 日間の日平均気温の平均値が 25℃以上になると増加し、これに伴い未熟粒の発生率が増大した(図 1)。なお、白未熟粒のうち 75%は乳白粒、心白粒であった(データ省略)。
3. 整粒歩合は出穂後 25 日間の日平均気温の平均値が 25℃を越えると低下する場合が多かったが、25℃以下の場合、概ね 70%以上であった(図 2)。
4. 平年気温から出穂後 25 日間の日平均気温の平均値が 25℃以下になるような出穂期を求めると、岡山では 8 月 28 日以降、赤磐では 8 月 23 日以降であった(図 3)。

## [成果の活用面・留意点]

1. 県中南部の移植栽培に適用できる。
2. 播種時期、移植時期については生育予測モデルなどを活用して決定する。
3. 白未熟粒、未熟粒、整粒歩合は粒厚が 1.8mm 以上のサンプルについて調査した。

[具体的データ]

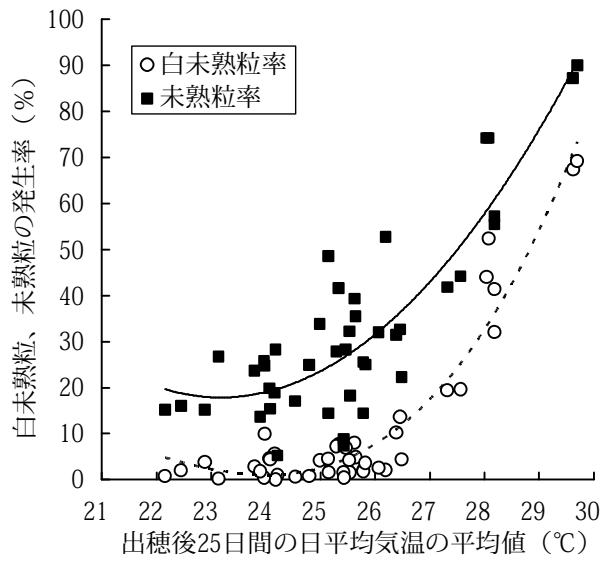


図1 出穂後25日間の日平均気温と未熟粒率、白未熟粒率の関係（平成16～18年）  
注）白未熟粒は未熟粒の内数

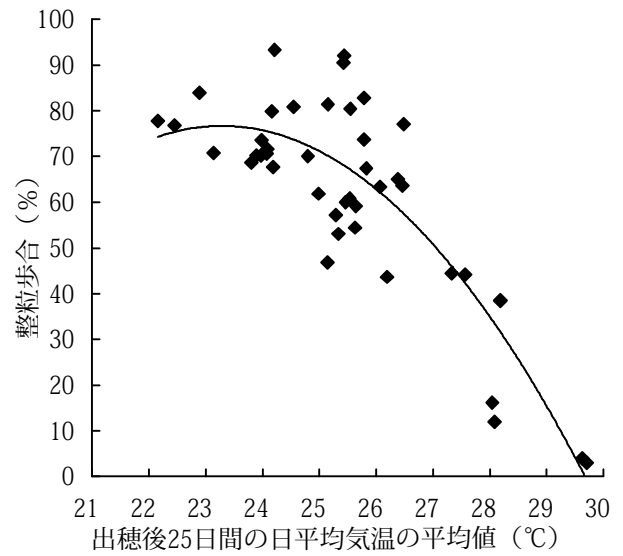


図2 出穂後25日間の日平均気温と整粒歩合の関係（平成16～18年）

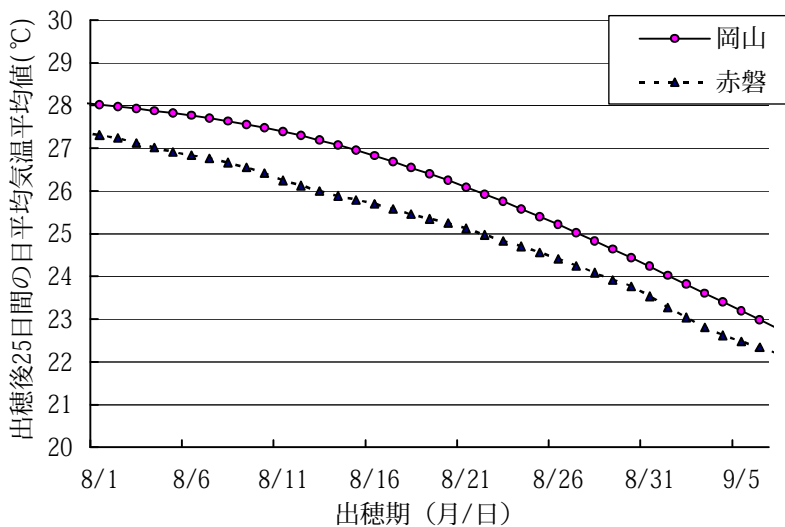


図3 出穂期と出穂後25日間の日平均気温  
注）出穂後25日間の日平均気温平均値は、岡山はアメダス平年値、赤磐は農試平年値を用いて算出した。

[その他]

試験研究課題・事業名：温暖化に対応した「コシヒカリ」、「あきたこまち」の品質向上対策

予算区分：県単

研究期間：平成 16～18 年度